校長メッセージ　～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校　丹羽

「勉強」と「学び」

「うちの子は遊んでばかりで勉強しなくて…」「今のうちから勉強をさせておかないと…」「勉強しないと将来が大変だ…」等々、子をもつ親の言葉によく登場するフレーズです。教育に対して熱心な人から発せられることが多いですが、こういう場合「勉強」という言葉を使い、「学び」という言葉を用いません。これはそもそも「勉強」と「学び」の違いを意識していないか、または混同して使用しているからだと思います。どちらもやることは同じのようですが、質的には全く異なります。

まず、「勉強」という言葉は、漢文読みをした場合に、「勉め強いる（つとめしいる）」と読みます。これが意味する所は、「例えどんなに嫌なことであっても仕方なく行う」というものです。これに対して、「学び」という言葉は、諸説ありますが、「真似ぶ（まねぶ）」から「学ぶ（まなぶ）」に変化していったとされます。そのため、「学び」は学習者が能動的に取り組む意味で使用されます。つまり、学習者の「自発性の有無」が関わるということです。

私たち大人に当てはめて考えてみても同様で、資格試験勉強等の場合は別ですが、「これをやったら絶対に仕事ができるようになる」といった便利な教科書があるわけではないので、自分自身であらゆることから学んでいく姿勢が大切になります。与えられる仕事のなかにも、自分の学びにつながる要素は必ずありますから、それを見つけようとする姿勢があるかどうかで、その後の成長には大きな違いが生まれるのではないでしょうか。

このように、「勉強」と「学び」という一般的には同じような意味として使われているふたつの単語ですが、このふたつの言葉の意味はまったく違うものです。私たちは、これまでの受験等の経験の影響からか、それらを同じようにとらえる傾向が強いように思います。

「勉強」と「学び」の違いは、英語にしてみるとよくわかります。勉強は英語では、「study」。その類義語となると「examination」や「inspection」になります。これらは、「試験」や「検査」を表す言葉です。つまり、決まった答えがあるものに対して解答が合っているかどうかを調べるといったニュアンスをもつ言葉です。まさに私たちが子どもの頃からイメージしてきた「勉強」ではないでしょうか。

一方の「学び」を表すのは、「learning」です。その類義語は、「wisdom／知恵」、「insight／洞察」、あるいは「cultivation／耕作・教養」、「culture／文化・文明」など。さらには「illumination」という「なにかに光をあてる」といった言葉も含まれます。つまり、「学び」とは、いままでわからなかったことがわかるようになったり、なんらかの知恵や経験によってできなかったことができるようになったり、自分の経験をもとにあることが自分のなかで腑に落ちたりといったように、勉強と比べて非常に広い意味をもつものです。

私たち大人が子どもたちに「学習は勉強（嫌なことであり、かつ耐え忍んで頑張るもの）」であるとばかり伝えたならば、そんな嫌で耐え忍ばなければならないことに自主的に取り組む子どもは滅多にいません。また、このような大人のメッセージは、子どもたちにとり、学習や仕事、ひいては社会に対してどのような印象を持たせることになるでしょうか。自ら率先して取り組んでいきたい、進んでいきたい対象だと感じないだろうことは容易に想像できます。子どもたちに送る「学習」に対する考え方のメッセージのあり方を大人として意識していきたいものです。